

## 留学生のための物語日本史

### 第 1 話 神武天皇

「今、この時をもって、私、カムヤマトイワレヒコ<sup>1</sup>は、ニニギノミコト<sup>2</sup>が言われた、『豊葦原（とよあしはら）の瑞穂国（みずほのくに）はわが子孫の君たるべき国なり』とのお言葉に従い、ここ大和橿原（やまとかしはら）の地にてこの国を治めよう」

神武元年の正月、カムヤマトイワレヒコ、現在になって神武天皇といわれる現人神（あらひとがみ）<sup>3</sup>は、橿原に宮を作り、そこで即位（そくい）したのです。

翌神武二年、大和朝廷の政府を作り、神武天皇が即位するまでに手がらをたてた者を様々な役職につけ、日本国の政治を始めたのです。あわせて八咫鳥（やたがらす）<sup>4</sup>を「幸を運ぶ鳥」とほめました。

「思えば、さまざまなことがあった」

橿原の宮から眼下に広がる明日香の町を見て、神武天皇は走馬灯（そうまとう）<sup>5</sup>のようにここまでの道のりを思い出していた。明日香の町にある家々からは、湯気が上がっていた。ちょうど夕飯時である。どの家も夕飯の支度で煙が上がっている。

「陛下、全て陛下のお導きがあつてのことで、民も皆、このように安心して夕餉（ゆうげ）をいただけるのでございます」

畝傍山（うねびやま）の西に住み神武天皇をお助けしているオオクメノミコト<sup>6</sup>がそのように言った。

「いや、オオクメ、このようになったのは、たくさんの尊い犠牲と、アマテラス<sup>7</sup>、そしてニニギノミコトのお導きがあつてのことだ」

「はい」

「ニニギノミコトの開いた日向国高千穂（ひむかのくにたかちほ）から出たのは、もう何年前になるのか。あの時は、四人の兄弟が皆そろっていたんだ。特に兄の五瀬（いつせ）は、頼りがいがあったし、武勇に優れていて非常に強かった」

神武天皇は、昔に戻ったように言った。

「はい、陛下のお兄様であらせられる五瀬さまは、非常に強うございました。しかし……」  
オオクメノミコトは少し涙を流して続けた。

「陛下がニニギノミコトのお言葉を実現するために、まずは九州を治め、そして東征を宣言されてから、我々は船で筑紫国（つくしのくに）の宇佐に行きました。宇佐では『やっと思い立たれましたか』と言われ、ずいぶんともてなしを受けました」

「そうだったなあ。ウサツヒコ<sup>8</sup>の姫であるウサツヒメ<sup>9</sup>とアメノタネコ<sup>10</sup>が結婚した。今後もこの国のためにはたらいてくれるであろう」

神武天皇は、眼下に広がる町の中の大きな屋敷に目を向けた。そこにはアメノタネコがいるはずであった。その屋敷からも夕餉の支度をしているであろう湯気が出ていた。

なお、このアメノタネコの先祖はアメノコヤネ<sup>11</sup>という。アマテラスがスサノオ<sup>12</sup>との不仲（ふなか）から嫌になって天岩戸（あまのいわと）の中に隠れてしまった時に、その岩戸が無事に開くように岩戸の前で祝詞（のりと）<sup>13</sup>を読み上げた神である。この一族は、後に「中臣氏（なかとみし）」となり、そして、中臣鎌足（なかとみのかまたり）が大化の改新の手がらによって中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）から「藤原氏」の苗字をいただく。そう、公家（くげ）の藤原氏の先祖にあたるのが、神武天皇の東征の時にウサツヒメと結婚したアメノタネコなのである。

「その後、安芸国（あきのくに）・吉備国（きびのくに）とまわり、その土地の皆さんに歓迎されましたね」

オオクメノミコトは、思い出したように話を進めた。

「安芸・吉備では国津神<sup>14</sup>（くにつかみ）のシイネツヒコ<sup>15</sup>が味方になった。今では彼も倭国造（やまとのくにのみやつこ）として頑張っている。こんなに頑張って大和の国を治めるとは思わなかった」

神武天皇には、昔、まだ水先案内人として、兄五瀬に言われて船の上を右往左往（うおうさおう）していたシイネツヒコの姿が目に浮かんでいた。

「そうですねえ。シイネツヒコもその後もずっと陛下にお仕えしております。そうそう、五瀬さまが亡くなられた時も、陛下のおそばにいたのは私とシイネツヒコでした」

「兄もなあ……」

吉備国を出た神武天皇の一行は、船で浪速（なにわ）に向かった。船で生駒山（いこまやま）をめざし、進んでいるときに、豪族（ごうぞく）ナガスネヒコ<sup>16</sup>が突然おそってきた。神武天皇の軍は非常によく防いだ。特に兄の五瀬は、先頭で指揮をとり、総崩れになりそうになった神武軍を立て直したのである。しかし、その間に五瀬は矢でうたれてしまい、大けがをしてしまう。

「あの時、私は船から一步も出ることができなかった。軍は兄の指揮でなければならぬと思っていたし、私などが指揮しても誰も動かない、かえって足手まといであると思っていた。あの時、私が兄を助けていれば、兄は死ななかったのではないか。私は今でもそう思っている」

神武天皇は、悔しそうに自分の太ももを自分のこぶしでなぐった。

「陛下、そんなことはございません。五瀬さまが亡くなられる時の言葉を思い出してください」

五瀬がまとめた軍は、ナガスネヒコの軍を追い払うと船に戻った。多くの兵を失ってしまった神武軍は、船を沖に出して避難（ひなん）したのだ。その船の中では、五瀬を治療（ちりょう）した。けんめいの治療で一時は持ち直したが、しかし、慣れない海上での生活でとうとう力尽きてしまった。紀伊国竈山（きいのくにかまやま）でのことであった。

「イワレヒコよ」

死の間際になって五瀬は神武天皇に話しかけた。

「よく聞け。父は、われら四兄弟の中でイワレヒコが最もニギノミコトの血を濃く受け継ぎ、神々や山や草木や海の声を知ることができると言っていた。そのため、兄である私が、それらを殺す役目をし、天孫の血を受け継ぐイワレヒコが神々の声を聴いて新たな時代を生み出すと決めていた。しかし、私がこうなってしまうのは、イワレヒコに両方をやらせてもらわなければならぬ。そうでなければ新たな時代は開けぬのだ。これからは磐余彦が軍を率い、そして神の声を聴き、古いものを壊（こわ）し、新しいものを作り出す。そうしてくれ」

「兄上様、そんな弱気なことをおっしゃらずに」

「イワレヒコよ、私も少しではあるが天孫の血を受けている。自分の命の炎が消えることぐらいはわかっている。ただ、私がいなくなって新たな時代が開けず、豊葦原の瑞穂国が治まらなければ、天の神に申し訳が立たない。イワレヒコよ、やってくれるな」

「はい」

「ではこれを授けよう」

五瀬は、そばにあった自分の使っていた剣をイワレヒコに渡すと、にっこりほほ笑んだ。そして、近くにいる多くの臣に言った。

「これからはこの剣をもつイワレヒコが軍の命令を出す。従わぬものは黄泉（よみ）の国<sup>17</sup>から私が成敗（せいばい）するからそう思え」

五瀬が息を引き取ったのは、翌日のことであった。

神武天皇は、神々の声を聴くとき以外は腰につけている「五瀬の剣」にそっと手を置いた。

「兄は、壊す役目、そして私が新しいものを作る役目。その二つの役目が私のところに重なった。はじめはうまくゆかなかったなあ。皆にも苦勞をかけた」

「はい、壊す役目も五瀬さまのようにうまくやらないと、自分たちを壊してしまう。五瀬さまが亡くなられてから、すぐに嵐にまきこまれ、多くの船と多くの臣を失ってしまいました

た」

「そんなピンチを救ってくれたのが八咫鳥とタカクラジ<sup>18</sup>であった」

やっとの思いで上陸した神武天皇の軍が南紀から熊野に向けて進んでいるときに、大きな熊が出てきて、神武天皇の軍は熊野の悪神の毒気により倒れてしまい、それ以上軍を進めることができなかった。その時に、アマテラスとタカギノカミ<sup>19</sup>が、葦原中国（あしはらのなかつくに）が騒がしいのでタケミカヅチ<sup>20</sup>を行かせようとしたところ、タケミカヅチは「自分がいなくとも、国を平定した剣があるのでそれを降ろせばよい」と述べたという夢を見たタカクラジが、自分の屋敷の蔵を探したところ、布都御魂（ふつのみたま）という剣が出てきたのだ。タカクラジは、その剣をかざすと、熊野の悪心の毒気はすべて消えてしまい、再び軍は元気を取り戻した。その勢いで神武天皇の軍は、熊野の悪神をすべて打ちほろぼしたのである。

「その後も様々ありましたが、次々と平定し、徐々に陛下の元に人が集まりました。そしてナガスネヒコと戦われたのです」

オオクメノミコトは、今戦いが行われたかのように段々と興奮しながら言った。

「ナガスネヒコは強かった。しかし祈りが通じて突然ひょうが降り、そして私のつがえた矢に、天の神がつかわせたトビがとまったのであった。矢と一緒に電撃のごとき金色のきらめきがナガスネヒコをおそい、そしてやっとなガスネヒコをほろぼすことができた」

「はい、そうでした。あの時は天の怒りのごとき光が陛下の放った弓とともに敵におそいかかりまして、いやいや、すごい光でございました」

「私も、あの時の光は忘れない。いや、私の目には、天の神がつかわせた龍（りゅう）がナガスネヒコをおそったように見えたのだ」

その後、神武天皇は、周りの地域の敵をほろぼした。そして、昨年、ニギノミコトが行った「東方の緑豊かな土地」を治め、豊葦原の瑞穂国を治めるに至ったのである。

この神武天皇が、現在も日本にいらっしゃる皇室の祖であり、万世一系の天皇家の初代です。神武天皇は、この国を治めるために、非常に苦勞をし、そして、瑞穂国を平定して民に平和をもたらしたのです。神武天皇は、その後、ヒメタタライズヒメの皇子のカムヌナカワミミを皇太子と定め、安定した政治を行ったのです。

「古いものを壊す」と「新しい時代を作る」こと、そして「壊すときもうまくやらないと自分までも傷つけてしまう」という五瀬の教えを守り、その教えを後の世まで伝え、そして、日本の発展を目指した天皇であったのです。

- 
- 1 神日本磐余彦火火出見天皇（かむやまといわれひこほほでみのすめらみこと）のこと。
  - 2 天孫瓊瓊杵尊（てんそんににぎのみこと）のこと。
  - 3 現人神：この世に人間の姿で現れた神。
  - 4 八咫鳥：神武天皇東征のとき、道を先導したという伝説上の大カラス。
  - 5 走馬灯：まわり灯籠（どうろう）。
  - 6 大久米命（おおくめのみこと）のこと。
  - 7 天照大御神（あまてらすおおみかみ）のこと。
  - 8 宇佐津彦（うさつひこ）のこと。
  - 9 菟狭津媛（うさつひめ）のこと。
  - 10 天種子命（あめのたねこのみこと）のこと。
  - 11 天兒屋命（あめのこやねのみこと）のこと。
  - 12 素戔鳴尊（すさのおのみこと）のこと。
  - 13 祝詞：神を祭り、神に祈る時に神前でとなえることば。
  - 14 国津神：日本神話の神々のうち、古くからの土着のもの⇔天津神。
  - 15 椎根津彦（しいねつひこ）のこと。
  - 16 長髓彦（ながすねひこ）のこと。
  - 17 黄泉の国：死者の行く国。
  - 18 高倉下命（たかくらじのみこと）のこと。
  - 19 高木神（たかぎのかみ）のこと。
  - 20 建御雷神（たけみかづちのかみ）のこと。